

河野哲也 著

『道徳を問いなおす』

—リベラリズムと教育のゆくえ—

ちくま新書 2011年 新書版 254頁 ¥819(税込)

鈴木嘉樹

昔、料理を食べ残すとよく父から「食べ物を粗末にするんじゃない。世界には飢えて苦しんでいる人がたくさんいるのだから」と小言を貰っていた。そのたびに私は、まるで見たこともないアカの他人のことなんて気遣ってられないと思っていたものだった。

一見何ということもないやりとりのようだが、しかし、道徳の観点からは重要な問いを発している。それは、自分の身の回りや帰属集団を超えた「見知らぬ他者」が存在する公共空間で、どうすることが正しいのか、善き関係性を築くにはどうしたらよいかという問いである。これはまさに、道徳の中心的な課題である。

本書はおもに学校教育を念頭に置き、道徳・道徳教育とは何か、その目的は何か・どうあるべきかについての哲学的・倫理的な規範論を展開している本である。中心となるテーマは「現代社会において道徳はどのように教育すべきか」(p.35)である。序章では従来の道徳教育の欠点を指摘する。あるべき人間像や教訓が過剰に詰め込まれており、また一方で政治性は不足しているという。まさに「道徳を問いなおす」ことが必要な状況にある。そこで著者は新たな道徳教育を提言する。それは「善き社会を構築する権利と義務を持つ主権者を育成する教育」(p.26)である。道徳教育に期待するのは、善き社会を構築するための態度・方法・スキルを身につけることであるとされる。

ところで、めざすべき道徳的に善い社会とはどんな社会であろうか。現代民主主義社会でもっとも浸透している価値はリベラリズムである。これは個人の自律性を平等に最大限尊重する態度のことをいう。リベラリズムは基本的に道徳的価値(自由・平等)と親和的だが、現代の民主主義

社会を考えると、二つの面で危機に瀕している。一つは、同質性を要求する近代社会と自律性を尊重するリベラリズムの衝突である。よく知られているように、多数決は多数者の専制を生む。これでは疎外されたマイノリティの自律性が脅かされる結果となる。もう一つの危機はリベラリズム自体に内在する矛盾、すなわち自律性の喪失である。私的領域の確保に専心すると、それが他者への無関心や公的領域からの撤退に転じる可能性がある。知の専門化と職業の分業化が進んでいる現代社会においては、公的領域における専門家のパターナリズムを生み出す。

このような二つの危機に対し、著者は、インクルージョンの理念と主権者教育の観点からリベラリズムの難点を克服している。民主主義の本質は多元性であり、「理解するが、同意しない」という洗練された距離感が重要であると指摘している。

本書では道徳的行為は善き社会を構築することだけにとどまらないとして、個人の道徳性の発達と他者へのふるまいについて、道徳の本質に迫る議論もまた展開されている。ケアの理論を基礎として、道徳性の発達の根源にはそれぞれ個別で特殊な他者への共感があると述べられる。また、ケアの態度を実質化し、平等で公平な福祉を実現するための方法論として、エコロジカル・ケイパビリティ・アプローチが妥当であると結論する。

第4章では、子どもへの教育を主眼に置き、各科目を社会参加と統治の観点から再編成すべきだとする主張と、道徳教育を行う科目として哲学の授業を創設すべきだという提案がなされる。哲学の効用は何か。それは、批判的思考と生活統合である。さまざまに溢れている情報を吟味・取捨選択すること、断片的な人生の経験をより広い視野で統合的に意味づけること、これらが現代社会で必要なものであるという。またそれは、他者と自己のニーズの発掘、共感を引き出すことに有用である。

本書の全体を貫いているのは、これまでの社会のあり方によって疎外されてきた人びとを含め、善き社会を構築せねばならないという思いである。著者は哲学を通して善き社会の構築を目指している。さて、私(たち)には何ができるだろうか。